

## ワ レ カ ラ 考

神戸市立西須磨小學校 古 川 博 二

## 緒 言

ワレカラといふ虫は、古來文學上頗る有名なものであるが、その正体は果して何であらうか。これについては諸説紛々として定説はない。無論今日動物學上で、ワレカラと稱するものは、甲殻類のわれから科に屬する *Caprella kröyeri* de Haan を指すのであらうが、こゝではさう言つたものだけではなく、古來文學上に親しまれて來たワレカラについて考へて見たいと思ふのである。

## 小 貝 説

ワレカラが文學上に現はれたのは、いつ頃のことであつたかは詳かではないが、伊勢物語に「戀ひわびぬ 蟹のかる藻に宿るてふ、われから身をも碎きつるかな」といふ歌が出てゐる。又古今和歌集卷十五、戀歌五の中に、典侍藤原直子の歌として「蟹のかるもにすむ蟲のわれからと ねをこそ泣かめ世をばうらみじ」といふのがあるが、句調のいゝ歌、女らしい優し味のある、あきらめの歌として、推賞されてゐる有名な歌である。ワレカラは「割れ殻」と「我故」の秀句であつて、そこに文學上の妙味があるのであらうが、此の頃さうした特別の虫があつたわけではなく、單に藻につく小虫の殻の割れたもといふのでワレカラといつたのであらう、といはれてゐる。これが後世固有名詞として、この虫の正体につき、種々の説が起り、殊にそれらの虫には、發音器管はなく、聲のないにも拘らず「ねをこそなかめ」と詠んだので、一層わからなくなつて、結局種々の説が起り定説がない。定説がないだけに、却つて、趣があり、かうして爲体の知れないワレカラはつひに文學上の寵兒となつたのであらう。

この歌は、そのまま謡曲に取り入れられて、「藤戸」の中に「海士の刈る藻にすむ虫のわれからと、音をこそ泣かめ世をばげに、何か恨みんもとよりも、因果は廻る小車の、やたけの人の罪科は、皆報いぞといひながら云々」といつて老婆が、佐々木盛綱に申し出る一節がある。又「海士」の中にも「海士の刈る藻に栖む虫にあらねども、われから濡らす袂かな」といふ句が見られる。

さてワレカラの本体は何であらうか。大和本草には「古歌によめるは藻に住む蟲なり」といひ、本草約言の「紫菜其中有小螺<sup>のり</sup>」を引いて、今按ずるに、此類われからなるべし、藻につきて、殻の一片なる螺あり、分殻の意なるべし、ふたなき故なり」といつて、古歌に詠まれてゐるワレカラと、又別にワレカラを螺類であるとの、二つの見解を述べてゐる。而して金丸但馬氏はこの螺について説明し、<sup>①</sup>*Simnia rhadia* A. Adams (ツグチガヒ) であるとしてゐるが、ツグチガヒを直ちにワレカラと斷じていゝか、どうかは疑問である。尙同書諸品圖に描かれて

①ツグチガヒは屬名の變更があり、只今は *Primovla rhadia* (A. Adams) となつてゐる。

るものは、一見モノアラガヒ *Lymnaea japonica* (Jay) に似てゐる。しかし、モノアラガヒは淡水産であつて、無論ワレカラには當らない。それについて曾永年の渚の丹敷下の卷三十六モノアラガヒの項に「あるひは、われからとおなじものと、いひなせるは、かうがへをうしなへり」と述べてワレカラとモノアラガヒとは異物であることを明かにしてゐる。筆者が諸品圖を見て、モノアラガヒを聯想したのと、思ひ合はせて、おもしろいと思ふ。尙諸品圖に添べて「海中の藻にすむ小貝なり、古歌によめり。色淡黒、大きさ三四分に不過、其殻われやすし。<sup>①</sup>ミゾガヒ<sup>②</sup>、キガヒに似て小なり。此の藻はナゴヤと云、淡青色かはげば紫色なり。日に曝せば白色、可食性不好、或曰松菜と云藻にも此貝あり、松藻は長くして莖大也」と述べてゐる。又大和本草批正には「螺類で長さ六分許幅一分許、エノミガヒに似たる貝」とあるが、エノミガヒが如何なる貝か、筆者にはわからない。なほ吳竹集、愚見抄にも、海草にとり付きたる小貝であると述べてをり、怡顔齋の介品に描かれてゐるワレカラの圖も小螺である。このやうにワレカラは、小貝であるとか、貝殻のわれたものとかの考へをもつものが可成多いが、それが何貝であるかはわからない。

### 小 蟲 説

前章に於てワレカラは小貝であらうとの説について述べたが、本章に於てはワレカラは、海中に棲む小虫であるとの説を拾つて見る。

茅原虚齋は茅窓漫録に於て、ワレカラは「我故」の義なれども、大和本草に、本草約言を引いて、「紫菜の中に小さき蛭螂有り、といふを據とし、藻に付て殻の一片なる螺あり。破殻の意なりといふは、牽強の説なり。吳竹集、愚見抄に見えるものも、似よりたる説なり」といつてゐる。さうして「一説に、伊勢にてはナリケリといふ虫八寸餘り、手足長く、色青しといふ。是説も覺束なし。伊勢物語の注に、和布、苔などに蝦のやうなる物の付きたるをいふと、是なり。此の虫形<sup>③</sup>アムムシに似て、長さ二三分、色青黄にして足長く、蝦の種類にて水を離れても能く飛ぶものなり。北國には佐渡に多し。四國邊には此の虫を藻と共に煮て、酒肴に充て食ふ。甚賞味なり」と述べてをり、ワレカラは小貝なりや、小虫なりやの點について検討してゐるが、結局未解決のまゝである。しかし蝦などの、甲殻類についてワレカラと関連させてゐることは了解出来る。

又拾遺抄註には、小さい蝦であると説き、大和本草批正にも「六足にして長さ一寸餘、蜘蛛の如し、尾張の海に居る」と述べてゐる。蒿蹊 伴の開田耕筆には「われからといふもの、小さきゑびの如く、と袖中抄にも見ゆ。越前、若狭、丹後わたりの方言には、ワレカラといふ。尺なぎといふものに似て、凡一寸許の赤きものなり。わかめ類の藻につけり。わかめ賣る女どもに、ありから多く付きたりと、咎むれば、ありからくはぬ上人もなしと申すと、こたふるよし、村井古巖語れり」とある。

①②ミゾガヒ及キガヒは何を指してゐるか不名なるも、現在のミゾガヒ *Siliqua pulehella* Dunker イガヒ *Mytilus crassitesta* Lischke はいづれも二枚貝で螺類ではない。

③アムムシは *Geris palladum* Fabricius, *Limnotrachus elongatus* Uhler 等をさすのであらう。

以上はワレカラを小虫とする説であるが、或は蝦といひ、或は蜘蛛に似たりといひ、考へはまちまちである。併し今動物學上で云つてゐるワレカラに稍々近い見解であり、尺なぎをシヤクトリと解するならば、その運動法も似てをり、かうした所から *Caprella* に對して、ワレカラの和名が與へられたのではないかと愚考する。

こゝに筆者は、古來和歌に詠まれたワレカラ即ち、割れ殻とか、破殻とかいはれるものは、*Serpula* 科に屬する *Spirorbis foraminosus* Moore et Bush (ウヅマキコガイ) ではないか、といふ見解をもつてゐる。*Spirorbis* は 0.5mm 内外の扁平螺狀の石灰質の殻を有し、海藻に附着してゐて、その形狀は、古人ならずとも、貝殻と誤られるのである。それで「ありから食はぬ上人もなし」といふ諺のワレカラは、蝦に似たワレカラではなく、藻についてゐる *Spirorbis* を「割れ殻」と誤認したところから出たのではないかと思ふ。だから持戒堅固な高僧でも、海藻についてゐるワレカラだけは、我知らず食ふものである。といふ事になるのではなからうか。

#### 動物學上のワレカラ

動物學上節足動物、甲殻類のわれから科に屬するものを云ふので、我が國産としては、30種ばかりが知られてゐる。そのうち、おほわれから *Caprella krøyeri* de Haan、とげわれから *C. scaura* Templeton、てながわれから *C. gigantochir* Mayer 等は最も普通な種類である。尙 *C. krøyeri* は、飯島魁氏の動物學提要、吉田貞雄氏の高等教育動物學、岩波動物學辭典、舊版動物圖鑑、平凡社の大百科事典等古いものには、ワレカラの和名が用ひてゐるが、昭和22年度改訂版動物圖鑑には岩佐正夫氏によりオホワレカラの和名が採用してゐる。

これら動物學上のワレカラについては、今こゝで詳しく述べることを控へたい。その形態、習性については、どの書物にでも出てゐることであり、それ以上のことについては、筆者自身何等の知識も持つてゐないからである。

#### 結 論

ワレカラの正体は、結局わからない。たゞ古來文學上親しまれて來たワレカラを考へるとき、二通の見方がある。即ち、藻につく小貝であると説くものと、藻に棲む小虫であると説くものとがある。さうして小貝といふ説も、何貝なりや、といふことになると、その説はまちまちで、これと言ふものはない。小虫説も亦同様であるが、大体に於て蝦の如き甲殻類といふことに一致してゐるやうである。さうして之が動物學上のワレカラと一つのつながりをもつてゐるやうに思はれる。大言海には「海に住む虫の古貝の破れたる殻などの、藻に附けるものとも、小虫、小蝦なども云へど、小貝なりとの説、可ならむか」と述べてゐるが、直ぐには賛成致しかねる。筆者は、小貝、小虫、小蝦などといふも、それらは、その時代、その人、の述べてゐるワレカラは、皆それでいゝと解したい。無論現代では動物學上歴然とした固有名詞となつてゐるのであるから、今後さういつた曖昧なワレカラは、文學上でも、あり得ないと思ふが、保證の限りではない。要は古來述べられてゐるワレカラは、その時代その和歌、その文學に關する限り、皆正しいと言ひたいのである。